

■ 大壁画「青春」について ■



中山正實作、神戸大学附属図書館社会科学系図書館の大壁画「青春」 1935(昭和10)年10月完成(2008(平成20)年8月撮影)

■ 大壁画「青春」の誕生

神戸大学附属図書館社会科学系図書館の正面玄関から2階に上がると、目前に巨大な壁画が出迎えてくれる。これが名高い大壁画「青春」である。洋画家中山正實(1898 - 1979年)により3年の歳月をかけて描かれ、1935(昭和10)年10月に完成した。中山画伯は、神戸大学前身校の一つ神戸高等商業学校(後に神戸商業大学となる)を1919(大正8)年に卒業した後、新進気鋭の洋画家として帝展6回入選、パリのサロン・ドートンヌ2回入選の快挙を果たしていたが、1932(昭和7)年34歳のときに母校神戸商業大学初代学長田崎慎治から新図書館の壁画制作の依頼を受けるや、一切の展覧会出品や美術団体等との関わりを断って画室に閉じ籠もり、ひたすら壁画制作に没頭した。完成した壁画は、縦3.61m、横10.68m、見る者を圧倒させる大作となる。

なお、1973(昭和48)年度に中山画伯により修復が行われ、画伯没後、2010(平成22)年度に再度修復された。

■ 11個のテーマ

壁画には青年24名と老人1名が等身大で描かれ、「大学の理想」を示す11個のテーマが設定されている。なお、女性性が1人も描かれていないのは、当時の大学が男性のみに門戸を開いていたからである。

まず、画面中央には、主軸となる2個のテーマが設定されている。上部には、**メインテーマ「理想」**を示す遙か遠くの高く清らかな雪の連峰が描かれており、その下には、雪の連峰を遠くから眺めて高さ理想に思いを馳せる青年と、折り倒されてもおお根元に新芽を吹く樹木が描かれ「**希望**」を示している。



▲ 修復の様子 2011(平成23)年2月

画面右半分の「**動の世界**」には、落葉樹の楡(なら)と5個のテーマが描かれている。「**謳歌**」を示す横笛を吹いて青春を謳歌する青年、「**友情**」を示す水を汲む青年と薪を拾う青年、「**勤労**」を示す働く青年、「**協同**」を示す岩を登る青年と彼を引き上げる青年、「**試練**」を示す丘を駆ける馬上の青年の図である。なお、「友情」は、江戸時代後期の儒学者広瀬淡窓作の漢詩の一節「君汲川流我拾薪(君は川流を汲め、我は薪を拾わん)」がモチーフである。

画面左半分の「**静の境地**」には、常緑樹の杉・松と4個のテーマが描かれている。「**平和**」を示す鳩を眺める青年、「**思索**」を示す湖畔で1人思索にふける青年、その隣には天上の真理を希求する老人とその語り聞き入る青年たちの姿で「**学究**」を示し、動物とたわむれる青年の姿で「**休息**」を示している。

大壁画「青春」の11個のテーマには、中山画伯が母校の後輩たちに向けた熱きメッセージが込められている。



▲ 大壁画「青春」を描く中山正實 1935(昭和10)年頃

中山 正實

なかやま まさみ



▲ パリで修行中の中山正實 1924(大正13)年

1898(明治31)年1月3日神戸生まれ。1914(大正3)年から独学で油絵を描き、印象派を研究。1915(大正4)年兵庫県立第二神戸中学校(現・兵庫県立兵庫高等学校)卒業、同年神戸高等商業学校(現・神戸大学)入学、毎年秋季に校内で洋画展を開催。1919(大正8)年神戸高等商業学校卒業、同年東京商科大学専攻部(現・一橋大学)で修学の傍ら、川端画学校洋画科に学ぶ。1921(大正10)年第3回帝展にて「**鉾山の夕**」が初入選。1924(大正13)年フランス・パリに画技習練のため留学。同年、パリのサロン・ドートンヌにて「**セーナ河畔の人々**」が入選。イタリヤでの壁画研究を経て、1926(大正15)年パリのサロン・ドートンヌにて「**猫と子供達**」が入選、1927(昭和2)年に帰朝。同年の第8回帝展から1931(昭和6)年の第12回帝展まで5年連続入選を果たした。

1932(昭和7)年34歳のとき、母校神戸商業大学より附属図書館の壁画制作を委嘱される。1935(昭和10)年神戸商業大学附属図書館の大壁画「青春」を完成(37歳)、ただちに同大学講堂の壁画三部作の制作に着手。1938(昭和13)年講堂壁画三部作「**富士**」「**光明**」「**雄図**」を完成(40歳)。1940(昭和15)年大和国史館万葉室壁画「**阿騎野の朝**」、1944(昭和19)年海軍兵学校壁画「**海ゆかば**」を完成。戦後、1946(昭和21)年連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)通信隊の美術顧問を委嘱される。1966(昭和41)年東京凌霜クラブ開設を記念して図書館壁画「青春」下絵を同クラブに寄贈。1973(昭和48)年図書館壁画「青春」を修復。1976(昭和51)年大阪凌霜クラブ開設を記念して六甲台講堂壁画「**光明**」「**雄図**」下絵を同クラブに寄贈。1977(昭和52)年六甲台講堂壁画を修復。1978(昭和53)年神戸大学経済学部・経営学部・法学部・経済経営研究所創立75周年を記念して1926(大正15)年以来描き続けたカラー・エッチング144点を神戸大学に寄贈(現在財団法人六甲台後援会が管理)。1978(昭和53)年5月75周年記念行事の一つとして学内で「**カラー・エッチング展**」開催。6月そごう神戸店でも開催。1979(昭和54)年1月7日逝去(享年81)。

(文責：神戸大学附属図書館大学文書史料室 野島理栄子)

神戸大学附属図書館
社会科学系図書館
歴史案内



(左) 正面玄関 (右) 大閲覧室 2012(平成24)年5月

■ 社会科学系図書館関係年表

年	月	日	事項
1902(明治35)年	3月	27日	神戸高等商業学校設置(神戸市葺合区(現・中央区)野崎通。神戸大学創立の起点)。翌年、神戸高等商業学校に図書課設置。
1929(昭和4)年	4月	1日	神戸高等商業学校が大学に昇格して神戸商業大学となる。神戸商業大学に附属図書館設置。
1932(昭和7)年	春	—	神戸商業大学初代学長田崎慎治が洋画家中山正實(神戸高等商業学校1919(大正8)年卒業)に新図書館の壁画制作を依頼。
1933(昭和8)年	10月	12日	神戸商業大学附属図書館が移転先の神戸市灘区高羽嘉太夫新田(現・六甲台町)に竣工(現在の社会科学系図書館)。
1935(昭和10)年	10月	25日	神戸商業大学附属図書館の大壁画「青春」(中山正實作)が完成。
1942(昭和17)年	12月	—	神戸商業大学附属図書館常会において、戦時下の空襲被害を避けるため稀観書の疎開が決定(八木助市館長の発意による。通称「図書館疎開」。準備期間を経て1944(昭和19)年12月から実施)。
1944(昭和19)年	10月	1日	神戸商業大学が神戸経済大学と改称。
1946(昭和21)年	7月	5日	連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)が神戸経済大学講堂等の接收を決定し、翌年接收。当初は附属図書館も接收対象とされたが大学側の猛反対により回避。
1949(昭和24)年	5月	31日	学制改革により神戸大学設置(神戸経済大学など兵庫県下旧制高等教育機関全7校を包括)。神戸大学に附属図書館設置。
	6月	22日	附属図書館に六甲台分館、住吉分館、長田分館、姫路分館が設置され、六甲台分館が旧神戸経済大学附属図書館を継承。
	12月	26日	附属図書館整備要綱(評議会決定)により六甲台分館内に附属図書館本部及び中央図書館設置。
1954(昭和29)年	1月	—	六甲台分館に「 凌霜文庫 」開設。
1960(昭和35)年	3月	28日	六甲台分館の書庫が増築され、現在の「 書庫C棟 」西側竣工。
1971(昭和46)年	3月	25日	六甲台分館の書庫が増築され、現在の「 書庫B棟 」東側竣工。
1973(昭和48)年	—	—	六甲台分館の外壁が修復される(この工事の振動により大壁画「青春」の一部に剥落や浮き上がりが生じる)。
	10月	18日	中山正實により六甲台分館の大壁画「青春」が修復される(修復期間：10月9日～18日)。
1980(昭和55)年	4月	1日	六甲台分館が六甲台図書館と改称。
1981(昭和56)年	3月	31日	六甲台図書館が増築され、現在の「 書庫B棟 」西側、「 書庫A棟 」、「 管理棟 」竣工。
1984(昭和59)年	4月	1日	六甲台図書館と文学部図書館を統合して人文・社会科学系図書館設置(自然科学系図書館と共に2大中央図書館となる)。
1986(昭和61)年	4月	4日	文部省より人文・社会科学系外国雑誌センターに指定され、同センターを人文・社会科学系図書館内に設置。
1992(平成4)年	3月	31日	中央図書館制廃止。
1995(平成7)年	1月	17日	兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)発生。学生・教職員41名が犠牲となり、附属図書館では書架倒壊等の被害を受けた。
	10月	30日	人文・社会科学系図書館内に「 震災文庫 (阪神・淡路大震災関係資料文庫)」開設。
2003(平成15)年	3月	18日	人文・社会科学系図書館が六甲台本館・兼松記念館・六甲台講堂と共に国の登録有形文化財となる(登録番号第28-0120号。登録名は略称の「 神戸大学人文社会科学系図書館 」)。
2004(平成16)年	4月	1日	国立大学法人化を機に附属図書館規則改訂。附属図書館に総合図書館(国際文化学図書館内に設置)、専門図書館(社会科学系図書館、自然科学系図書館、人文科学図書館、国際文化学図書館、人間科学図書館、経済経営研究所図書館)及び分館(医学分館、海事科学分館)設置。この改組により人文・社会科学系図書館は社会科学系図書館となる。
	8月	—	社会科学系図書館フロンティア館増築竣工(社会科学系総合研究棟フロンティア館の地下2階～地上3階(一部)部分)。
	11月	8日	社会科学系図書館内において図書館資料展示会が初めて開催される(～14日。以後、毎年開催)。
2005(平成17)年	9月	—	社会科学系図書館本館2階階段上の油絵「 新秋 」(中山正實、1928(昭和3)年制作、第9回帝展入選)が修復される。
2010(平成22)年	3月	31日	社会科学系図書館本館2階大閲覧室の閲覧机(神戸刑務所、1933(昭和8)年3月製造)が修復される。
2011(平成23)年	3月	31日	社会科学系図書館の大壁画「青春」が修復される。
	8月	—	社会科学系図書館所蔵の油絵「 ヴェニス海岸 」(中山正實、1925(大正14)年制作)、「 街頭の母子 」(同、1926(大正15)年制作)、「 冬 」(同、1929(昭和4)年制作、翌年聖徳太子奉讃展入選)、「 波濤 」(同、1938(昭和13)年制作)が修復され、大閲覧室に掲額。
2012(平成24)年	4月	1日	社会科学系図書館で一部改装(3月28日入退館管理システムが導入される。2013(平成25)年度に大規模改修工事予定)。

神戸大学附属図書館 社会科学系図書館の あゆみ

■誕生

神戸大学附属図書館社会科学系図書館は、学内最大・最古の図書館であり、国の登録有形文化財に登録されている。旧制神戸商業大学附属図書館として1932(昭和7)年9月8日着工、1933(昭和8)年10月12日竣工した。設計は文部大臣官房建築課、施工は大林組がそれぞれ担当した。鉄筋コンクリート造2階建てであり、後方に5階建ての書庫が繋がる。書庫には当時では珍しい昇降機装置(エレベーター、1935(昭和10)年3月30日竣工)が設置された。なお、書庫は戦後に増築が繰り返されたため、竣工当初の状態をとどめる「書庫C棟」東側だけが文化財に登録され、今もそこだけは木製の床となっている。竣工当時、図書館の1階には、玄関、広間、受付、事務室、館長室、整理室などがあり、2階にはカード箱室、特別閲覧室、大閲覧室などがあつた。

■建物について

建物の外壁は、淡黄色のスクラッチ・タイル張りである。スクラッチ・タイルは、楡(い)で引っかいたような縦線の模様をもつタイルで、大正末期から昭和初期にかけて日本で大流行した外装材であり、F.L. ライト設計の旧帝国ホテルに用いられたことでも有名である。軒下のバラベット部分は、ロンバルディア・アーチと呼ばれる小さなアーチの繰り返し模様のテラコッタ張りで仕上げられている。

玄関ホールを入ると開放的な吹き抜け階段が正面に現れ、天井にはステンドグラスのトップライトがあり、静寂の中に光が降り注ぐ魅力的な空間となっている。階段を2階へ上がると、正面に洋画家中山正實作の大壁画「青春」(1935(昭和10)年完成、詳細は別記)が出迎えてくれる。大壁画の中央下には書庫出入口の扉があり、そこから書庫C棟の3階に入ることができる。大壁画の向かい側には「大閲覧室」があり、広い室内は心地よい緊張感が漂う。高い吹き抜けの大アーチ型天井にはステンドグラスのトップライトが施され、重厚で歴史の重みを感じさせる木製の大型閲覧机がずらりと並び、学生教員らが真剣な眼差しで勉強研究に励む。この威厳に満ちた大閲覧室は、当館を代表する顔となっている。

■戦時下の図書館疎開

戦時下、日本本土が初めて空襲を受けたのは、1942(昭和17)年4月のことである(東京空襲)。その8カ月後の同年12月、神戸商業大学では、附属図書館常会において、空襲被害を避けるため稀観書の疎開が決定された。人命や学舎の安全よりも図書館蔵書の避難が最優先されたのである。これは八木助市長の発意によるもので、おそらく日本最初の図書館疎開ではないかと評された(『凌霜五十年』)。予算不足の中で準備が進められ、神戸商業大学が神戸経済大学と改称された2カ月後の1944(昭和19)年12月第1次疎開(佐用郡中山村)が実現。スミス、マルサス、メンガー、マルクスの初版を含む稀観書約300冊が特製木箱約40箱に密封されて農家の土蔵にトラックで運び込まれた。翌年5月第2次疎開(美囊郡志染村、準稀観書約800冊)、6月第3次疎開(美囊郡淡河村、洋雑誌バックナンバーを含む貴重図書約3,000冊・図書館重要書類・蔵書カード)が実施され、第4次疎開の準備中に敗戦となった。この間、同大学予科の図書館が神戸大空襲で全焼し蔵書は灰燼に帰したが、大学図書館は無事だった。現在の社会科学系図書館には、戦禍を免れた貴重な図書が数多く残されている。

■神戸大学附属図書館の軸

1949(昭和24)年新制神戸大学の誕生により、旧神戸経済大学附属図書館は、神戸大学附属図書館六甲台分館(法学部、経済学部、経営学部、経済経営研究所の図書館)に引き継がれた。附属図書館には当初4つの分館が設置されたが、六甲台分館は、学内最大の図書館施設と最大の蔵書数を誇る中心的存在であり、同年、同分館の建物内に中央図書館が設置された。1980(昭和55)年六甲台図書館と改称、1981(昭和56)年同館に管理棟が竣工、1984(昭和59)年同館と文学部図書館を統合して人文・社会科学系図書館が設置され、自然科学系図書館と共に2大中央図書館制(1992(平成4)年まで)が築かれた。1986(昭和61)年文部省から人文・社会科学系外国雑誌センターに指定されると、人文・社会科学系図書館の建物内に同センターが設置され、1995(平成7)



▲ 竣工まもなくの旧制神戸商業大学附属図書館の遠景
1937(昭和12)年頃



▲ 旧制神戸商業大学附属図書館の正面玄関
1939(昭和14)年頃



▲ 旧制神戸商業大学附属図書館2階「大閲覧室」1937(昭和12)年頃



▲ 旧制神戸商業大学附属図書館2階出庫カウンターと大壁画「青春」
1939(昭和14)年頃

年兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)が発生し多数の犠牲者が出た際には、被災地の中心にある図書館の責務として貴重な震災資料の収集保存のため「震災文庫(阪神・淡路大震災関係資料文庫)」が、1999(平成11)年神戸大学電子図書館システム運用開始の際には電子情報掛(現・電子図書館係)がそれぞれ人文・社会科学系図書館の建物内に設置されるなど、本学附属図書館の軸であり続けた。

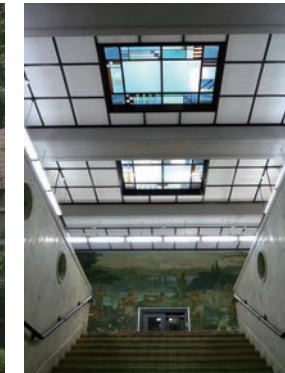
■文化財への登録

人文・社会科学系図書館の建物は、昭和初期の学校建築の好例として認められ、2003(平成15)年3月18日「造形の規範となっているもの」として国の登録有形文化財に登録された(同年4月8日文部科学省告示第69号により告示。登録名は略称「神戸大学人文社会系図書館」。登録番号第28-0120号)。

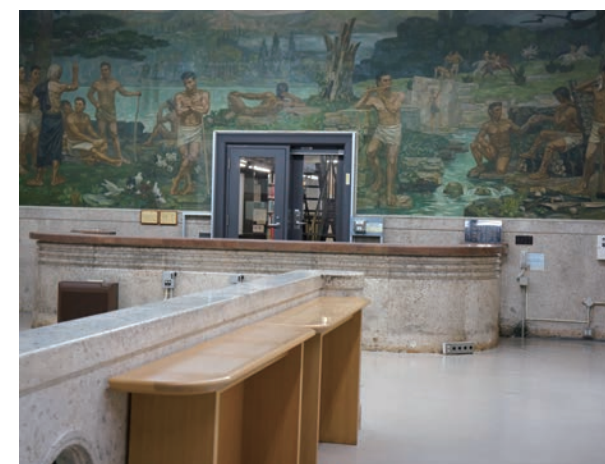
なお、2004(平成16)年国立大学法人化を機に、社会科学系図書館と改称。さらに国際文化学図書館と同一施設内に「総合図書館」が設置されたが、総合図書館の独立建物が新築されるまでの当分の間、中央機能は引き続き社会科学系図書館に置かれている。(文責:神戸大学附属図書館大学文書史料室 野邑理栄子)



▲ 神戸大学附属図書館社会科学系図書館の正面玄関と本館2階天井のステンドグラス
ステンドグラスには「KOBEL」・「UNIVERSITY」の文字が刻まれている
2012(平成24)年



▲ 神戸大学附属図書館社会科学系図書館本館2階「大閲覧室」
2012(平成24)年



▲ 神戸大学附属図書館社会科学系図書館本館2階書庫入口(職員用)と大壁画「青春」
2012(平成24)年



▲ (左上) 竣工当初の書庫の様子 1938(昭和14)年頃
(右上) 旧制神戸商業大学附属図書館の蔵書印の一つ
(下) 神戸大学附属図書館六甲台分館時代の書庫のエレベーター 1954(昭和29)年頃



▲ 大閲覧室の閲覧机脚部の彫刻 2012(平成24)年



▲ 人文・社会科学系外国雑誌センターと震災文庫
2001(平成13)年頃



▲ 「書庫C棟」の重厚な階段と書架 2012(平成24)年



▲ 正面玄関外の照明
2012(平成24)年



▲ 国の登録有形文化財となる
2003(平成15)年3月18日登録

